

こども学科学生によるオレンジリボン運動の取り組み

アザリア祭でのオレンジリボン広報・啓発活動

松尾由美・桑原千明

1. はじめに

2013 年度において、全国の児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数は 73,765 件であり、この件数は年々増加の一途をたどっている。このような現状の中で、子どもへの虐待問題の解決は社会的急務であり、様々な観点から虐待を防ぐための取り組みが行われている。それらの取り組みの一つとして、子ども虐待に関する問題への社会的関心を高めることを目的とした『オレンジリボン運動』が行われている。オレンジリボン運動は、2004 年に小山市で起きた児童虐待事件をきっかけに始まり、現在、NPO 法人児童虐待防止全国ネットワークによって活動が推進されている。

1.1 学生によるオレンジリボン運動の必要性

虐待の主な要因として望まない妊娠、保護者の養育能力の低さや育児不安が想定されている。このような要因を背景に、虐待を防ぐために親になる前の 10~20 代の若年者を対象に養育や虐待に関する知識等の広報・啓発活動の推進が提言されている(厚生労働省社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会, 2013)。この提言を踏まえ、子ども虐待のない社会の実現を目指す「オレンジリボン運動」の一環として、2013 年度より「学生によるオレンジリボン運動」が実施された。運動が始まった 2013 年度には、全国 113 校の大学等の約 4,000 人の学生が主体的に虐待予防のための広報啓発等に活動した(厚生労働省, 2014)。活動の多くは、学園祭で来場者に対してオレンジリボン運動を啓発するものであった。

1.2 本学における「学生によるオレンジリボン運動」実施の必要性

本学こども学科は、教育者・保育者として必要な資質・能力を高めることにより、教育・福祉の振興に寄与できる人材を養成することを教育目的の一つとしている。日ごろから子どもたちと身近にかかわる教育者・保育者は、異状に気付く機会が多いため、虐待を早期発見する役割を担うことが強く期待されており(児童虐待の防止等に関する法律 第 5 条)、また実際に子どもへの虐待を最初に発見する可能性も高い。東京都福祉保健局の調査によれば、保育所・幼稚園が第一発見者となる割

合は 33%であり、近隣住民などと比べ最も高い（東京都福祉保健局，2005）。加えて、子どもの保護だけでなく、関係機関等と連携しながら家族の養育態度の改善を図ったり（保育所保育指針第 12 章）、行政機関等による介入に拒否的な反応を示す保護者を支援することに努めるよう求められている（厚生労働省，2007）。

将来、保育者としてこのような役割を担うことが期待される保育者を目指す本学の学生も、オレンジリボン運動において虐待に対する自身の理解を深めるとともに、啓発活動に関与する経験は非常に有意義であろう。そこで本稿では、本学こども学科学生有志による「学生によるオレンジリボン運動」の取り組みについて実践報告をし、今後、保育者としての力を高めるために本運動への参加をどのように活用すべきか論じる。

2. こども学科学生によるオレンジリボン運動への取り組み

2.1 本学における「学生によるオレンジリボン運動」実施の目的

将来、保育者を目指す本学こども学科学生によるオレンジリボン運動を実施する。上述の通り、保育者は虐待の第一発見者となることが期待されており、子ども虐待に関して深く理解することによって、子どもの変化を敏感にとらえ適切に対処する力を高めることにつながるだろう。また、保育者は保護者に対して適切な養育ができるように支援することも求められており、他者への虐待防止啓発活動は、保育者として保護者支援に取り組む際に有益な経験になると考えられる。

本運動は、虐待発見・保護者支援という、保育者が虐待防止のために持つべき力の育成に有効な手段となりうるだろう。したがって、保育者養成校である本学こども学科の学生が本運動に参加することは、本学の教育目的にも適うことである。

そこで、取り組みの初年度として、本学こども学科の学生有志によって、本学園祭（アザリア祭）の来場者に、子どもへの虐待に関する問題やオレンジリボン運動について理解を深めてもらう運動を試行した。

2.2 方法

（1）参加者

本学こども学科 2 年生 8 名が本運動に参加した。また、顧問として心理学に関連する科目を担当する教員 2 名が運動を支援した。

（2）事前準備

アザリア祭当日に、来場者への啓発活動を行うための事前準備として、「子ども虐待」についての理解を深めるための勉強会を数回開催した。勉強会では、参加学

生がそれぞれ担当テーマを決め、そのテーマについて調べて発表した。発表時には理解度を向上させるためにグループディスカッションも実施した。勉強会の最後には掲示用ポスターを制作した。ポスター制作の際には、色遣いや字の大きさを工夫したり、イラストを用いたりすることで、理解しやすいポスター作りを心掛けた。

(3) アザリア祭当日の取り組み

アザリア祭期間中、心理学をテーマとした展示部屋の一角に、オレンジリボン運動のコーナーを設け、子ども虐待について知ってもらうためのポスター(自作含む)を掲示した(来場者約 1500 名)。部屋への来場者にポスターについて説明をするとともに、リーフレットを配布し、子ども虐待防止の重要性を伝えた。

2.3 参加学生の変化

本運動に参加した有志学生に対して、参加前後で、子どもへの虐待やオレンジリボン運動に対する理解について尋ねた。本運動に参加した 8 名中 8 名全員が運動参加前に「オレンジリボン運動」についてほとんど知識を有していなかったが、運動参加後には「オレンジリボン運動」や子どもへの虐待について理解を深めることができたと回答した。また、子ども虐待について調べたことで、虐待のこと、虐待がもたらす影響のこと、その後のケアのことなどについて、今までより詳しく知ることができたといった、参加者自身の虐待に関する理解が深まったという感想が多く見られた。加えて、オレンジリボン運動のことをこれまで知らなかったが、虐待を受けた子どもが負う深い傷について知ること、虐待を減らすことができるよう今後も活動してみたいと感じたといった感想や、今後、保育者として社会に出たときに、今回の運動から学んだことを役立てていきたいと考えるといった感想など、虐待防止活動への参加意欲向上が見られた。

3. 「学生によるオレンジリボン運動」の保育者養成校における活用に向けて

参加学生の感想や取り組みの様子から、参加者自身の子どもの虐待に関する知識や理解が深まったことがうかがえる。事前勉強会において子ども虐待について調べたり、他者が理解できるように資料化したりといった経験が、知識向上につながったと考えられる。また、これまでの先行研究によって他の人を説得するというロールプレイングによって説得者自身にも態度や行動変容が生じることが示されている(Horsley, 1977)。単に、虐待に関する勉強会に参加するだけでなく、他者に伝えるという経験がさらなる理解や態度変容をもたらした可能性が示唆される。本運動を通じた虐待に関する知識習得と理解促進は、虐待の第一発見者とならなければなら

ない保育者に必要な力を向上させうる。今年度は、運動参加初年度であったことから、一部の学生のみが参加した。しかし、このような力をより多くの学生が身につけるために、授業中等、学生が参加しやすい機会に実施することが望まれる。

一方、今回の本学での取り組みは参加者自身の子ども虐待への理解は深まったものの、保護者支援に必要な力を育てるまでには至らなかった。その理由として、本取り組みの目的が、虐待に関する知識の伝達にとどまっていたことにある。この目的のもとでは、学んだことを他者に一方的に伝えることに力点が置かれていた。しかし、保育者としては、様々な立場にある保護者の心理状態を想像して学んだことを相手に合わせて柔軟に伝える力が求められる。今回の取り組みはこの力を育てるのに不十分であり、次年度以降の課題である。この課題を克服するために、目標の変更と取り組み内容の見直しが考えられる。目標の変更としては、子ども虐待に関する知識を伝達するだけでなく、様々な考えを持つ人の意識を変えることを目標にすることが挙げられる。また、取り組み内容の見直しとしては、単に資料化するだけでなく、保護者役と保育者役に分かれて制作した資料を使用して保護者の虐待に関する意識を変えるロールプレイングを経験させることなどがあるだろう。

参考文献

Horsley, A.D. (1977). The effects of a social learning experiment on attitudes and behavior toward environment conservation. *Environment and Behavior*, **9**, 349-384.

厚生労働省 (2007). 子ども虐待対応の手引き <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/00.html>

厚生労働省 (2014). 若年者に向けた児童虐待予防のための広報・啓発の取組結果 http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/h25_orange.html

厚生労働省社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会 (2013). 「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について」(第9次報告)

東京都福祉保健局 (2005). 児童虐待の実態Ⅱ 一輝かせよう子どもの未来、育てよう地域のネットワーク <http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/jicen/gyakutai/index.files/hakusho2.pdf>